

〔研究会報告〕

南山宗教文化研究所主催セミナー第1回 「学会誌への論文投稿」趣旨と報告

守屋友江

MORIYA Tomoe

本セミナーは、南山宗教文化研究所の新たな試みとして、大学院生やポスドク、early career の若手研究者を主な対象に、日本語および英語の学会誌への論文投稿をするにあたって留意すべき注意点やアドバイスを行うことを目的として実施した。とりわけ、第二言語による論文投稿を検討している、留学生を含めた研究者にも役立つ情報を提供することを念頭に、日本語の『近代仏教』（日本近代仏教史研究会）¹ 編集主任の大谷栄一氏（佛教大学教授）と、英語の *Religious Studies in Japan*（日本宗教学会）² 編集長の星野靖二氏（國學院大学教授）のお二人に、セミナー講師を務めていただいた。『近代仏教』は近年、日本人だけでなく海外にルーツをもつ研究者による論文やシンポジウム報告などを多く掲載しており、また *Religious Studies in Japan* は日本宗教学会会員を中心とする執筆者の、宗教学に関する英語論文や学会パネル報告に基づく論文を含んでおり、いずれも定評のある学会誌である。

プログラムは下記の通りである。

日時：2023年7月10日（月）19時～21時

会場：Zoom

講師：大谷栄一氏（佛教大学、『近代仏教』編集主任）

星野靖二氏（國學院大学、*Religious Studies in Japan* 編集長）

司会：守屋友江

オンラインということもあってか、平日の開催にもかかわらず国内外から72名の申

1. <https://www.mjbh.jp/journal>

2. <https://jpars.org/bulletin-religiousstudies-en.html>

込みがあり、当日は45名が参加した。このことから内容への関心の高さがうかがえる。とりわけ、南山大学大学院をはじめ各地からの大学院生やポスドクなどの若手研究者が多かったのは、主催者として大変喜ばしいことであった。

*

まず、大谷栄一氏に日本語雑誌への投稿について、続いて星野靖二氏に英語雑誌への投稿について、それぞれレクチャーを行っていただいた。諸学会での編集委員・査読経験を踏まえての、お二人によるレクチャーとその後の質疑応答の概要は以下の通り。

大谷栄一氏

論文執筆自体については解説書があり、また指導教員からの指導があると思うので、それを参考にしてもらうこととして、今回は論文投稿と査読に関するレクチャーを行う。社会学系の学会では査読の方法や詳細な投稿ガイドラインが公開されているが、とくに宗教学系に限っていえば必ずしもそうになっていないことが多く、課題といえるだろう。そこで、他領域での投稿と査読に関するガイドラインや運営方法などを論じた先行研究と、複数の学会編集委員会での経験をもとに、日本語の学会誌への投稿に必要な基礎知識と注意点などを説明することとしたい。

査読がない場合もある学内紀要と違い、学会誌は編集委員会による厳密な査読が行われる。この査読体制は学会により異なる。学外での発表や論文投稿は、いわば他流試合のようなもので、研究の視野や枠組みを広げ、深めるのに役立つ。学会誌は、編集委員会・査読者・投稿者の三者によるやり取りを通して投稿論文の採否と評価が決まる点では共通している。投稿する学会誌の投稿規定やバックナンバーの掲載論文、査読ガイドラインなどの公開された情報を事前に把握して、査読体制と学会誌の特徴を踏まえておくことが役に立つだろう。学会によっては掲載の可否だけを投稿者へ報告する「研究的査読」の場合もあるが、近年は、投稿者へのアドバイスや具体的な修正を教示する「教育的査読」を行う方針の学会が増えているように見受けられる。ちなみに『近代仏教』では「教育的査読」を行っている。

『近代仏教』を事例に、投稿者が留意すべき事項として次の点を挙げておく。「前提」として当該の学会誌が自分の研究領域に合致するかどうかを確認し、「形式面」として投稿規定やガイドラインに沿った、誤字脱字などケアレスミスのない論文を投稿する。第二言語での投稿の場合は、必ずネイティブチェックを受けるのが望ましい。「内容面」は問題設定の適切さ、先行研究を踏まえた議論展開などのほか、論文のオリジナリティが何であるかを、できるだけ一次史料を用いて明示することが求められる。そして「研

究倫理」として盗用や二重投稿、個人情報保護といった問題に抵触しないよう、細心の注意を払う必要がある。

星野靖二氏

英語で論文を執筆することは、日本語論文を書く場合と異なるのだと自覚的に考える必要がある。*Religious Studies in Japan (RSJ)* では、かつて日本宗教学会の日本語の学会誌『宗教研究』掲載論文の一部を翻訳として掲載しており、また他の業務でも日本語-英語の双方向翻訳に関わってきたが、単純にそのまま訳せば良いというわけではないことを、最初に強調しておきたい。

その上で、なぜ英語で論文を書くことが重要であるか。メリットとしては日本語以外の話者に読まれる機会が増えることで、自分にとって研究上の交流がグローバルに展開され得ることが挙げられる。また、研究業績の中に英語論文が含まれることのメリットも大きいといえる。執筆にあたっては、自分で英語論文を書くというだけでなく、自分の研究領域に十分な知見をもち信頼できる翻訳者との協働で翻訳することも、選択肢として有効である。というのも、日本語論文の形式で書いたものをそのまま翻訳しても、読者層の異なる英語論文としてよい内容になるとは限らないからである。ただし、翻訳者に翻訳を依頼する場合にも、そもそも英語に翻訳しやすい日本語で書く必要があり、また英語論文として適切な構成・形式である必要がある。日本語論文を執筆するために身につけた「論文の書き方」は、自分の専門領域で通用するものであっても他分野ではそうでない場合もある。とりわけ引用方法のルールに顕著だが、日本とは異なる「論文の書き方」が前提となっている場合があることを意識することは重要である。英語論文の書き方のルールを知るには、英語論文を多く読んで学ぶことが最も近道であるといえる。その他、和訳された英語論文を読むことも参考になる。

実際に書くにあたって、まず投稿雑誌の読者層を念頭に置くことが肝要である。英語の場合は学会誌だけでなく自由投稿が可能で定評のある学術雑誌もあることから、その雑誌の特徴を把握して専門用語や説明を考えて執筆することが求められる。次に、日本の研究動向がそのまま英語論文の読者層の研究動向と重なるわけではないため、より広い研究上の議論との「接続」を考慮に入れた論述をすることも有効であろう。その際、論点と議論の構成を自覚的に練っておくことが鍵となる。また史資料を引用する場合、原文訳にこだわるだけでなく、わかりやすく言い換えたものを訳したり、要約を用いた方が読者にとって有益な場合もある。いずれにせよ、書誌情報は必ずスタイルガイドに沿って書くことが望ましい。

最後にひと言。英語論文を発表することは「英語圏での研究ネットワークに参加する」ことであり、執筆だけでなく学会でパネルを組むなど、研究交流や共同研究を継続する

といいだろう。

*

質疑応答

質問1: 大谷先生に二つ質問があります。一つ目は査読者からのコメント通りに変更できない場合、他学会の雑誌に投稿し直すことはいいものだろうかという点、二つ目はエントリーした場合、その時点で査読者が決まるのか論文が提出されてから査読者が決まるのか、どちらであるのか、という点です。それから星野先生へは、英語と日本語の論文を書くにあたって、最も大きく違う点は何であるのかについてうかがいたいです。

大谷氏: 一つ目の質問に答えると、『近代仏教』をはじめ多くの学会で、査読者の判断だけではなく編集委員会での議論を経て評価が決まるため、変更できない理由についての投稿者からの意思表示と説明をしてほしいと思います。その上で、それでも編集委員会が変更を求めようであれば、他学会に投稿し直すのは問題ないと考えています。二つ目については、多くの場合、論文提出後に査読者が決まります。論文の内容を見ただけで、適切な査読をできる専門家を選んでいきます。

それとは別に、たまにあるケースとして、学会発表をして論文投稿をしたらすぐに退会してしまう人がいます。編集委員会としては、将来、学会を支えていってくれることを期待しているので、諸事情があるかもしれないが、できるだけ学会には残っていてほしいという気持ちがあります。

星野氏: 一ついえるのは、argumentがないと英語論文としては弱い位置づけになるという点でしょう。資料分析を十分に行っている論文が、良い日本語論文として評価されることもあります。その資料・資料分析の学術的意義や枠組みについても触れることで、よりよい英語論文になると思います。

質問2: 私は前近代の日本思想史を専門としているため、英語論文に翻訳する際、現代日本語で書き加えようとするところに解釈が入ってしまうという問題があります。日本語だと原文の後に解釈を加える形をとりますが、英語の場合は翻訳する時点で解釈が入るのをどう対応したらいいでしょうか。

星野氏: その点は確かに悩みどころですが、例えば原文を引かなくても議論できるような記述の仕方にすることもできるのではないのでしょうか。想定する読者によって原文の翻訳が必要となる場合もあるかもしれませんが、その場合、文語体であればそれにふさわしい英語で書くことが望ましいので、やはりネイティブの学識者に確認してもらうという手順を踏まえる必要があるでしょう。

質問3: 学際的な内容で複数の学会に関わるような論文の場合、どこの学会誌に投稿し

たらよいか迷うこともあると思います。そうしたケースについてアドバイスをお願いしますか。

大谷氏：『近代仏教』の場合、近代仏教史プロパー以外の会員による投稿も歓迎するけれども、明らかに他学会の方がふさわしいと思われる投稿論文もあります。そうしたミスマッチを防ぐには、その学会の学術大会に参加して発表したり他の発表を聞いてみたりすると、いいのではないのでしょうか。学会発表での質疑応答などで反応を見て、それから論文投稿という流れがスムーズなのではないかと思われます。

星野氏：RSJの場合、宗教学という広い領域をカバーする学会の機関誌であるため、学際的にも宗教学に関する内容であれば問題ありません。逆に、普段日本語で書いている若手研究者が最初の英語論文を掲載の難しい学術誌に投稿しても、なかなか掲載まで至らないかもしれないことを考えると、RSJは最初の英語論文の投稿先として一つの良い選択肢ではないかと思っています。ただし、投稿するには日本宗教学会の会員である必要があります。

また、英語でも学会発表をしてからRSJなどの学会誌へ投稿する、という流れでいくのがスムーズでしょう。海外へ行かなくとも、日本国内でも、例えばAsian Studies Conference Japan³が毎年開催されており、これは会員資格なしで誰でも英語で発表できるものです。

質問4：星野先生に二つ質問があります。一つ目は翻訳者との協働、という時に投稿するまでなのか、採択後に修正する時までなのかという点です。二つ目は翻訳者の氏名を書くかどうかという時に、どのような記載がいいのかという点です。

星野氏：一つ目については、理想的には査読後に修正を終えるまで携わってくれる翻訳者で行うのがいいでしょう。二つ目は、翻訳者がいる場合は必ずクレジットを付けることが必要です。ただし、自分が書いてネイティブに校閲してもらったという場合は、校閲の度合いにもよりますが、校閲者のクレジットは不要である場合もあります。

大谷氏：私も翻訳者に依頼して英語論文の投稿をしようとしているけれども、まず翻訳向けの文章にして執筆しています。また、International Association for the History of Religions⁴などの国際学会での発表は、日本語とは違う準備をして、日本の学会とは異なる反応が返ってくるので、その学問的刺激も非常に有益だといえるでしょう。かつては、大学院の紀要で論文を発表してそれから学会誌へ、という順番が前提にあったけれども、今日では必ずしもそうではない。最初から学会発表や論文投稿をする場合があるので、大学院生の場合は研究計画を立てて実践するのが望ましいのではないのでしょうか。

3. <https://ascjapan.org/>

4. <https://www.iahrweb.org/>

*

南山宗教文化研究所では、研究会だけでなく若手研究者などを対象とする研究を進めるうえで役立つセミナーを、今後も開催する予定である。今回はオンラインであるが、対面での研究交流ができるような企画も、随時実施していくこととしたい。

もりや・ともえ
(南山宗教文化研究所)